

## プログラム・ノート

寺西基之

### グリーグ: チェロ・ソナタ イ短調 作品36

ノルウェー国民楽派の作曲家エドヴァルド・グリーグ(1843～1907)は、シューマンなどドイツ・ロマン派の影響を強く受けたスタイルに基づきつつも、その中にノルウェーの民俗音楽の特徴を取り入れることで、民族主義に相応しい作風を確立した。チェロを弾いた兄ヨーンのために1882～83年に書かれたこのチェロ・ソナタもそうした作風が如実に示された傑作で、ロマンティックな響きのうちにノルウェーの民謡の旋律語法や舞曲のリズムを織り込んだ北欧色豊かな作品である。

**第1楽章**(アレグロ・アジタート)は暗く激しい第1主題と静穏な第2主題を持つきわめて劇的なソナタ形式楽章で、旋律にもリズムにも随所に民俗音楽の特徴が取り入れられている。**第2楽章**(アンダンテ・モルト・トランクイロ)は深い叙情を湛えた緩徐楽章。清澄な主要主題に始まるが、中間部では不安に揺れ動く感情を映し出す。**第3楽章**(アレグロ～アレグロ・モルト・エ・マルカート)はチェロのモノローグの後、ソナタ形式の主部が続く。民俗舞曲の要素をふんだんに盛り込んだフィナーレである。

### ラフマニノフ: チェロ・ソナタ ト短調 作品19

ロシアの作曲家セルгей・ラフマニノフ(1873～1943)が残した唯一のチェロ・ソナタであるこの作品は、作曲家としての名声を不動なものにすることになった有名なピアノ協奏曲第2番に続いて、1901年に生み出された。以前から深い親交があり、共演も重ねていたチェリストのアナトーリー・ブランドゥコフ(1859～1930)のために書かれたソナタで、表出力豊かなチェロと技巧的なピアノの絡みのうちにロシア的情感を力強く表現した作品である。特にピアノ・パートは自身がピアノのヴィルトゥオーゾだったラフマニノフらしく、難度の高いものとなっている。

**第1楽章**(レント～アレグロ・モデラート)は序奏付きのソナタ形式で、情熱的な第1主題とメランコリックな第2主題をもとに起伏ある発展を示す。**第2楽章**(アレグロ・スケルツァンド)は動的なスケルツォ。**第3楽章**(アンダンテ)は暗い叙情が広がっていく緩徐楽章である。**第4楽章**(アレグロ・モッソ)は勢いある喜ばしい第1主題と大らかな第2主題による華やかなフィナーレ。最後はヴィヴァーチェの終結部で終るが、これは初演後に付加されたものである。

(てらにし もとゆき・音楽評論)